



句集
風
かせ

藤井美晴
Kobayashi Eiji

ゆるやかに風流れをり大芭蕉

風が好きだから句集名を『風』とした。風は形も影も色もなく、いつでもどこにもあって、流れる時が面白い。何か風のようなものがフーと通り過ぎたと感じられるような句がこの中に一つでもあれば幸いだ。—— 著者

桃
の
花
畑
越
え
て
く
る
鶏
の
こ
ゑ

マ
ヌ
カ
ン
の
頭
捨
て
あ
り
春
の
雪

山焼の灰降る道を来たりけり

山焼の火ほが殻らの浮ける山の湯に

苔むせる羅漢薄墨桜散る

この町を発ち行く朝あした花吹雪

去る家の門かどの泰山木の花

武蔵野に通り雨来る花水木

中国
四句

春もやへ溶けゆくポプラ並木かな

石門せきもんに玉蘭にほふ春の月

長城を西へ超えゆく夏の蝶

白楊の並木涼しく真つ直ぐに

風吹けばひととき白し椎若葉

鯉のぼり家郷の駅に降り立てば

岩国

樟若葉錦帯橋を渡りけり

花えんじゆ槐象牙の色に濡れてゐる

インド 九句

日盛りの往還を行く緋のサリ

緋のサリ素足に軽ろき土埃

蚊の命惜しむとて口おほひゆく

贅^{にえ}の血を野犬が舐むる日の盛り

山羊の血のぬめる跣の足の裏

灼ける土乞^{かた}丐^{たい}に脚の無かりけり

歩けば粘る炎昼のアスファルト

薔薇にほふ夜天井に守宮鳴く

白壁にブーゲンビリヤ影を濃く

黒富士のずんと座したる大夕焼

ビルの間に浮き留まれる赤とんぼ

秋の風ニコライ堂の坂を来る

所在なき伊香保の夕べ小芋食ふ

門司の出と言へる老妓の秋扇

長崎

西坂になごめる秋の入日かな

明るすぎる秋の日差しに母逝けり

門司 六句

訪ね来たりしふるさとの柿もみぢ

昼の雨もみぢを鳴らしきたりけり

紅葉且つ散る日の入りとなりにけり

夕闇を踏めば枯葉のほひ立つ

草の露ひとつひとつに月の光

五位鷺のこゑ通りゆく星月夜

セメントがにほふ建設現場冬

富士近し丹沢近し今朝の冬

旧満州 二句

車窓に見遣る遼^{りょう}寧^{ねい}の冬の闇

息白く樺の木立を馬車が来る

虎^も落^{がり}笛^{ぶえ}途絶えてよりの人の声

夜回りの子供の声が遠ざかる

しんしんとしんしんと雪奥利根に

月冴えて暗渠に落つる水の音

鉄塔に掛かれる寒の二日月

塀越しに梅を仰ぎてゐる白髪

はだれ雪紅灯ぼつりぼつり点く

末黒野を夜汽車の窓の明かり過ぐ

著者略歴

藤井美晴 (ふじい・よしはる)

昭和15年(1940) 福岡県門司市(現北九州市)生まれ

平成13年(2001)「やふれ傘」創刊会員 現在 同人

俳人協会会員 日本俳人クラブ会員

句集 風

2024年3月31日 第1刷発行

著者 藤井美晴

発行者 大崎紀夫

発行所 株式会社ウエップ

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-24-1-909

電話 03-5368-1870 郵便振替 00140-7-544128

印刷 モリモト印刷株式会社

※定価はカバーに表示してあります ISBN978-4-86608-457-1